

《討論》

豊かな時代と高度経済成長を考える — 菊地史彦『「幸せ」の戦後史』についての討論 —

庄 司 俊 作

はじめに

A ヤー，しばらく。また君と最近読んだ本について議論したくて連絡させてもらった。忙しいのに，勝手な申し出に快く応じてくれてありがとう。この，菊地史彦『「幸せ」の戦後史』（トランスビュー，2013年，以下，『幸せ』と略記）は2年前の4月に出版されたが，8月には三刷が出ている。学術書ではないが中身が固く，売れそうにないが，その割には足が速い。前にもいったように今，僕は仲間と高度成長史研究会を立ち上げて，日本の戦後と高度成長の歴史を研究している。何か研究のヒントが得られるのではないかと思い，書名に惹かれて三刷の本を買った。その時，少し読んだら歌謡曲のはなしで始まり，映画やサブカルチャー，オウム，例の東電OL殺人事件，最後は中島みゆきの歌で終わっているだろう。研究の関心としては経済や社会の歴史にほぼ限られ，文化的素養はいたって乏しい僕には手におえないと途中で投げ出した。ところが，最近読んだ熊沢誠『私の労働研究』（堀之内出版，2015年以下，『労働研究』と略記）の中で熊沢氏が短い文章で本書を紹介している。戦後の労働社会も本書の重要なテーマであり，著者のその方面での議論は熊沢理論にかなり影響されている。熊沢氏自身も本書を紹介したのは「身最賃があるかもしれない」と断っているが，尊敬する熊沢氏が取り上げるぐらいだから，きちんと読まなければと思い，今度はメモをとりながら読んだ。簡単な文献紹介や学術書の書評であれば，普通のやり方をとるべきである。本書のような，どちらかというと評論本でありながら，労働研究を中心に既存の研究を踏まえながら，同時に確かな歴史認識を持ちつつ日本の戦後史を語っている本を取り上げるには，他に適切な方法がありうる。多様な表現方法をさぐっている僕としては，歴史家としてはるかに視野が広く，かつ知識も豊富な君といつもやっ

る討論の形式で多角的に論じ合うのがいいと思って、厚かましくまた無理をお願いした。

B 田中優子氏（法政大学総長）がどこかで本書を褒めていた記憶がある。著者の菊池氏は筑摩書房の編集者だった時に、田中氏の本（『江戸の想像力』1986年）を出していることを本書で知った。僕は君ほど好奇心が旺盛でなく、今も史料読み以外は専門分野の論文や書物を読むのが精いっぱいなので、本書も大学の公費で買っておいたままだった。今日はいちおう読んできたが、積極的な討論者としてあまり期待してほしくないね。いつものように君が中心に論じ、僕はもっぱら聞き役、議論の引き出し役に徹するというごとうでお願いしたい。

A 分かっている。歴史家には、経済史をやっている人間にはなかなか真似のでない独特の歴史的センスというものがある。本書について、僕は戦後史に関する歴史認識の本として読んでみたいと思っている。君にはプロのセンスを発揮してもらって、議論の方向性を間違わないようにコントロールしてもらいたい。

1 本書の概要

B では、君から本書の概要を説明してくれないか。

A 本書は文化現象や雇用慣行を解析しながら、戦後70年の日本の社会意識の変化を考察したものである。「社会意識の変化」が本書のキーワードである。見田宗介に依りつつ、ある社会集団の成員に共有されている意識を社会意識と定義したうえで、その本質は変化、ダイナミックな力であると見る。具体的に社会意識事象の発見と分析が目的であり、人びとの「願望の『筋』を『豊かな暮らし』と見る。その願望が噴出する枠組みとして検討されるのは、豊かさの手段である労働の営まれる現場、豊かさを分かち合う家族、そのモデルであった『アメリカ』の3領域である」（『労働研究』209頁）。内容は3部構成。第Ⅰ部は、1990年代から2000年代にかけて起きた労働（リストラ）、雇用（非正規雇用）、職場（職場の変調）などの社会事象を扱っている。「日本社会が決定的な変容を遂げた時期」であり、「高いリスク意識と、競争的な個人主義と、格差への恐怖を生み出したまま」、「そのインパクトを我々はまだ消化しきれていない」とする。第Ⅱ部は、戦後家族の意識変容がテーマである。「60年代から90年代にかけて、家族がどのような欲望をどのような手段で実現しようとしたのか」、日本映画とオタク文化、そしてオウム真理教を素材に「欲望の成就と失敗を描いている」。第Ⅲ部は、

「アメリカとの接触のもとで進行した〈社会意識〉の構造的変化」を日本的な雇用・労働管理と消費社会の成熟、村上春樹の初期作品の3つの切り口から論じている。戦後の社会意識は「主にアメリカに学びながら形成されたが、ギリギリのところアメリカから身を離すことに成功した。しかし、その70年代後半の『離陸』は成就せず、頓挫した可能性がある」というのが著者の見立てである。最後に終章は、「受け入れられない自己」というテーマのもと、戦後の社会意識を屋台骨のように支えてきた『『豊かな暮らし』を享受したいという願い』の一方、それが「すんなり受け入れられない、あるいはそのような場所から自分をはじかれていると思う自己」の社会意識事象を論じている。まとめすぎで分かりにくいかもしれないが、本書の概要についてはまずこんなところだ。

- B 一通り読んだ僕の感想をいうと、元編集者としての勉強家ぶりがよく出ている本だ。博引旁証には驚く。ただし、そのためか説明足らずの事項も少なくない。それを支える読書量は並みのものではない。多くの研究書にもきちんと目配りしている。このあたりは編集者魂のなせる技か。そして、問題の論じ方がいい意味でも悪い意味でも手練れの編集者であった印象を与える。評論家的というべきか、例えばこんなところ。「70年代、日本がアメリカと奇妙な『一体化』を起こしたのは確かである。戦後一貫して、絶対的な先導者、保護者であったアメリカを、日本はようやく相対化し、対象化し、飲み込んだ。それはアメリカ離れのように見えたが、実は離陸ではなく、アメリカの日本化であり、日本がアメリカ以上にアメリカ的な日本になることだった」（『幸せ』319頁）。これは第Ⅲ部第3章「村上春樹と対米闘争」の一節だが、別に間違っただけを言っているわけではない。言っている意味はよく理解できるが、少なくとも研究者は実証・論証ぬきにこのような大胆な言い方はしない。こういう言い方が随所に見られるが、われわれ研究者には欠点に映る反面、だが十分に刺激的であることを強調したい。刺激的というのは、ここで重要な歴史認識に関わっている。さらに、本書を読むうえで重要と思われるのは、著者が元編集者であるという点に加え、1952年東京生まれ、大学は文学部卒、筑摩書房倒産後、同社を退社、「編集工学研究所などを経て、99年、ケイズワークを設立し、企業の組織課題やコミュニケーション戦略を中心にコンサルティング活動」を行い、現在同社社長、という経歴である。出版社退職後の人生は必ずしもハッピーでなかったこと、精神的にも物質的に苦勞したであろうことは本書の記述からもうかがわれる。本書で主に熊沢誠氏や小池和男氏の研究業績に依拠して主軸の雇用労働問題を論じたり、文学やサブカルチャーを取り上げたり、終章で何人かの「受

け入れられない自己」の肖像を描いているのは、こうした著者の人生の歩みと切り離せないだろう。本書は著者の人生の投影でもあるのではないか。研究者の仕事もそうした側面が皆無とはいわないが、本書の場合、投影の程度がかなり高いと思う。だが、それは部分的な欠点にとどまり、それよりも精彩のある叙述を可能にしているというメリットの方を強調したい。歴史家の命は史料批判である。その伝でまず、少し本書の「書物批判」を行った。

A 君のいっていることにほぼ同感だ。僕としては、著者は君や僕と同じ1952年生まれということと、われわれは地方の生まれであるが、著者は東京の生まれであることをとくに重視したい。僕は農業・農村研究なので労働研究のフォローは十分ではないが、それでも現状の労働研究ではわれわれの世代は「小池、熊沢の時代」を体験し、圧倒的な影響を受けたことを自覚している。本書では雇用労働問題、日本的経営論がテーマの主軸であるが、小池理論、熊沢理論の影響が濃厚であり、そこに世代の特徴が見える。浦山桐郎の映画（代表作『私が捨てた女』1969年）や山田洋次監督の『男はつらいよ』（1969年）も、石原裕次郎・小林旭からロマンポルノへの日活の路線転換（確か1970年）も、消費社会の出現と成熟も、庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』（1969年）に続き70年代に登場した村上春樹や高橋源一郎らの作家も、円谷幸吉の栄光と自殺（1968年）も、永山則夫の「連続ピストル殺人事件」と不幸な生い立ち（逮捕は1969年）も、中島みゆきの歌もすぐそばにあった。中核派学生生活動家の奥浩平の服毒自殺は小学校卒業直前で記憶にないが、遺稿集『青春の墓標』は大学入学後すぐ読んだ。これらについて著者のように社会意識事象として論じる気も能力も僕にはないが、同い年で同じ時代の空気を吸った人間として、著者の問題の受け止め方、感性はよく分かる。どの問題も読んでいてスッと頭に入ってくる感じだった。

2 本書における「幸せ」とは

B いかにも元編集者が書いた本と思わせるといった。これは悪い意味でなく、いい意味でね。いろいろな本を読んで、多くの知識を動員して、分析やレトリックも編集者としての仕事の積み重ねで養われた。各章に読み応えのある多くの注記も書かれている。

A 少し悪くいえば、その結果、やや主観的、感覚的な叙述が多分にある。熊沢氏も本書を評して、雇用労働を論じるのに統計がひとつもないと書いていたが（実は図が4つ）、だから当然、本書について研究上の問題に引きつけてあれこれ議論しても意味が

ない。本書の叙述を踏まえながら、戦後史の各時代をどのように捉えるのかを焦点にして、自由に討論したい。

B そうだね。そこで、僕から問題を出していいかな。この本の書名は『「幸せ」の戦後史』だけど、内容を考えれば『「不幸せ」の戦後史』の方が適切なのではないかと思った。もっといえば、『「豊かなくらしの中の不幸せ」の戦後史』とすれば内容に即したものになる。日本的経営や、農林漁業層やブルーカラーの子弟のホワイトカラーへの階層上昇や大衆消費社会については触れられているが、この点の叙述は月並みであり、重点は明らかに平成リストラと雇用の「構造改革」、それに伴う「不機嫌で不可解な職場」の現出などに置かれている。

A 言われてみればそうだね。それは結局、高度経済成長期の捉え方が弱いことに関係している。君がなかなかいい指摘をしてくれたので、それを受けて、意見をいわせてもらう。著者は、戦後、憲法 25 条をもとに、国民みんなが豊かな暮らしを追求するため「成り上がり」を企てたと述べている（戦後家族の階層上昇戦略）。なるほど、日本の戦後は成り上がりの時代か。元編集者だけにキャッチーなネーミングだ。戦後、世代間移動がきわめて高く、しかも農民層や都市の零細企業経営者、ブルーカラーの子弟が高い教育を受け、ホワイトカラーに成り上がる比率が高いことは周知の事実である。問題は、こうした「庶民の、最も可能性の高いサクセスストーリー」には、少なくとも農民層に関しては一定の歴史的变化があることである。要点だけいえば、①大学（短大を含む）進学率は高度経済成長とともに急激に上昇した（1955 年 10.1%→1975 年 37.1%）、②男女、あるいは都市・地方（郡部）間の大学進学率の格差は 70 年代前半になくなり、その後も③単に大学進学率で見ると、地方の方が都市部よりも高い状態がずっと続いている。農家の後継ぎも、昭和 20 年代には中学だけというのは少なかったが、高校に行かせてもらっても農業高校、それも農業もできる定時制というのが東北では少なくなかった。大学に進学するというのは、普通の農家であればまだ例外的ではなかったか。その点では、戦前の構造がまだ続いていたといえる。それが昭和 30 年代に入って普通に高校に行くようになった。しかし、大学への進学はまだ、たとえ学力があっても許されないことが少なくなかった。農家の子弟が普通大学に行くようになるのは、これも地域差はあるがやはり 60 年代後半から 70 年代前半にかけての時期と見られる。大学進学は自由は当然ながら、家意識や農業の拘束から身軽な次三男や子女にはもっと早くから保証されていた。大学進学率の歴史的变化の背景を大まかにまとめると、以上のようなことになる。

- B また、君の持論を聞かせてもらった。著者の場合、戦後ずっと家族の成り上がり戦略が「目覚ましい効果を発揮したのは60年代までだった」、「70年代以後は…敗色濃い趨勢を押し戻すことができなかった」と書いている。70年代以後は成り上がりの挫折が多くなったという認識かしら。
- A 曖昧な言い方だけど、だろうね。研究者じゃないからしつこく詮索するつもりはないが、高度成長の捉え方に関わってくるからね。都市のブルーカラー等についてはよく分からないが、農家の子弟の場合、高度成長によって大学進学率が急上昇したことは明らかだ。さっきの話に関連して、ここで個人的な体験を少し語っていいか。個人的な事柄であるが、時代の状況を反映していると思っている。そして、教育は、高度経済成長の歴史的意義を考えるうえできわめて重要なテーマの一つと考えている。君も知っているように僕は兵庫県淡路島の南端の村で育った。家は分家で普通の農家、祖父が分家したときから農業と、細々と製瓦業を営んでいた。親戚には14、12歳違いの叔父や双従兄がいる。14歳違いの叔父は母の末弟だが、僕と同じ高校から東京の大学(国立)に進んだ。母の実家も普通の農家で、母は高等女学校出だが伯父や伯母は大学はおろか、旧制中学等に進んだ者は1人もいない。勉強がよくできた叔父は、4年間は経済的に苦しいので短大ならという祖父の意向を蹴っての大学進学だった。学生時代は経済的にかなり苦勞したようである。双従兄は父方の祖父の兄(本家)の孫であるが、本家のある部落は農業が盛んで、本家はそこそこの農家、戦前には僅かだが人に農地を貸していた。祖父の兄弟、大伯父の子は多くが教員になったような家である。その家の後継ぎである双従兄は小さい時から家の後を継ぐようにいわれ(洗脳され)、高卒で家の農業を継いだ。それなりに勉強もでき、大学に行きたかったようだが、大伯父らの反対で進学がかなわなかったという話もある。ちなみに、双従兄の長男は大学院を出、現在神戸で大学の教員をしている。
- B ちょっと待った。君の悪い癖で話が拡散してきた。高度成長と豊かな暮らしという問題で話をしている。われわれのひと回りの上の世代では、相対的に豊かな農村でも経済的理由や家の問題で大学進学は自由ではなかったということをいいたいのか。われわれは1971年入学だから、君の叔父さんらは58年前後に大学に進学したことになるね。
- A そうだ。淡路島は戦前から比較的豊かだった。それでも、高度成長が始まって間もない時期には、叔父のような苦勞をしなければならなかった。大学に入っても、学資が続かず毎日天井の節をかぞえるよう生活を送り、兄や姉に援助を頼んだという。双

従兄の場合は、明らかに家の問題だ。こうした時代に比べ、われわれの時代は、4年制の大学に十分いけるのに、経済的理由で短大にしろといわれたり、あるいは、兄の場合は少しあったようだが、家を継ぐということで進学を反対されたことはなかった。兄とは2才、弟とは4歳違い、3人とも70年前後から前半に大学に入った。「国立、現役」が父親の厳命であったが、何とか入学し卒業できた。

B 僕も似たようなものだ。それにつけて思うのは、授業料年間1万2,000円の絶大なる効果だ。奨学金も月8,000円でなかったか。君や僕みたいに地方から、しかも兄弟が重なって大学に入るなんて、これがなければ絶対無理だった。月1,000円の授業料など、当時でも授業料無償みたいなものだ。ただし、われわれが卒業した後、授業料が急激に引き上げられた。

A 僕は大学院では寮生活をし、授業料も免除してもらった。大学院の奨学金は結構よかったので、寮生活をすればアルバイトなしでも楽々生活ができた。そうした意味で、われわれの学生時代は今と比べ隔世の感がある。この本の著者流に言えば、公正と平等の社会意識が強く働き、それをもとにした国の政策のおかげであると正直思っている。農家（の子弟）にとって、高度成長は農地改革に次ぐ「第2の解放」であり、自分の人生を自己決定できる健全な社会を全面的ではないが作りだした時代だったのではないか。農家に生まれた以上、自分の意志に反して家を継ぎ農業をしなければならないほど、その人にとって不幸で残酷なこと、社会として不健全なことはない。誤解しないでほしいが、僕は農家の子どもが家の農業を継ぐことを否定しているわけではない。農業が好きで継ぐのは結構なことである。農業が嫌いなのに、長男、息子だからといって強制的に継がせることはよくないといっているだけである。

B この本の著者はあの東村山団地で育ったと書いている。地方や農業、農家のことは分からないのじゃないか。

3 社会意識事象の歴史性について

A この本の読み方について、著者の雇用労働問題の理解や日本的経営論の当否を議論しても仕方ないといった。総じて、既存の研究を踏まえ、日米関係の歴史を含め要領よくまとめている。議論すべきは、著者がいう社会意識事象の取り上げ方、その歴史性の理解についてである。

B そういうことであれば、少しは役に立てるかもしれない。それで、具体的にどうい

うこと？

A さっき高度成長は農家の子どもにとっては福音だったみたいなことをいった。これはある意味間違いないのだけれど、当然ながら、それに伴うひずみはあった。どういうことかという、高校3年のとき、淡路島の高校だけれども大変な騒動があった。高校では、進学を希望する生徒のために1学年全10クラスのうち2クラスをトップクラスとして、勉強のできる生徒を集め、特別に進学対策の指導、教育をしていた。先ほどの叔父の時代からあったというから、辺鄙な田舎だからそうでもしないととも大学受験を勝ち抜けないということだったのだろう。これに対して、他のクラスから差別だという猛烈な声が上がリ、騒動に悩みに抜いた1年下の生徒会長が高校近くの高台で首をつり自殺した。1クラス家庭科があって、その女子生徒が、私たちはこの高校の男子生徒と交際もできないといていたのを覚えている。騒動は4、5カ月続いたので、3年の夏休みまでほとんど勉強できなかった。僕はとていばいたって能天気な生徒で、生徒総会の場で「君らは差別というけれども、それは違う。君らは就職でがんばれ、僕らも進学でがんばる」旨の発言をして、ある先生から「しっかりしている」とお褒めの言葉をいただいた。ただし、そういう僕も夏休み前の定期試験はボイコットするグループに加わった。

B 1970年だろう。あの時は大学紛争のあおりで高校でもあちこち紛争が起きた。そうした流れの中の現象だよな。

A そうだ。生徒に対するある教師の暴力、暴言から火を噴き、中心になった生徒のグループの背後には学生時代過激派だった教師がいると聞いた。それはどうでもいいけれど、進学か就職、勉強ができるかできないかで、生徒がこのような被差別意識、心の傷を持つものかと考えるときがある。結局、騒動の後、このようなクラス編成は止めることになった。その結果、僕の高校でもそれまでは旧国立一期校の難関大学に合格する者が毎年10人余りいたが、止めた後は激減し、現在はそうした大学に合格する者はほとんどいなくなった。

B 80年代は、学校が「荒れた時代」である。知り合いの元高校教師に聞くと、いじめ、生徒による暴力で大変だったという。その後、管理教育が強まる。教育は社会、政治の問題に直結すると思っている。だから、君の個人的経験も聞かせてもらっているが、本書に出てくる、超進学校の生徒が親を殺す2件の話は、歪んだエリート意識がうかがえて考えさせられるが、筋が違う問題ではないか。

A 本書では触れられていないが、矢沢永吉の『成りあがり』も80年代ではなかったか。

テレビのインタビューに、「何よりも金が欲しい」とギラついて答えていたまだ30代の矢沢を覚えている。また、中島みゆきの『ファイト』も80年代初め。これについては、熊沢氏が「長男が『これ、お父さんの好きそうな歌』と友人から借りてきたテープで『ファイト』を聴いて以来、私は中島みゆきの熱いファンになった。みじめな自分や索漠とした環境を自虐的なまでに見つめ、その落ち込みの底から、どこまでも絆を求め、決して屈しない自分をまた立ち上がらせる。彼女の歌のそんなメッセージはいつも、どこかで私の労働研究を励ます」（『労働研究』260頁）と書いている。いかにも熊沢氏らしい書き方である。学校が荒れたことも、オタク文化も、サブカルチャーも、そして学歴エリートの組織に変わったオウム真理教も、教育の大衆化を経た段階における、さまざまな階層の「みじめな自分を見つめ、その落ち込みの底から」、著者流に言えばそれぞれ形と性格は違うが彼らなりの「強い個」を求める欲望に突き動かされた行動ではなかったか。いずれも高度成長により教育が大衆化する前の時代には起こりえなかった社会意識事象と考えられる。それらは高度成長が生み出したものであり、学校が荒れたことやオウム真理教の犯罪については明らかに日本の高度成長のひずみといわざるをえない。

- B 終章「『受け入れられない自己』の肖像」で永山則夫や奥浩平を取り上げているが、確かに「受け入れられない自己」の事例ではあるが、問題の位相はこれらと違う。東電OL殺人事件の渡辺泰子も、果たしてこういう趣旨の話に適切であろうか。素材の選択、叙述にナイーブな歴史家としては首をかしげたくなる。
- A 村上春樹の評価はどうだ。僕は現代作家では松本清張、司馬遼太郎、藤沢周平の世代だから恐れ多くて読んだことがない。一般的かもしれないが、アメリカとの関係という観点からの作家研究は確かにおもしろい。
- B 僕も何も語る資格はない。ただし、日本のアメリカ化やアメリカの日本化、つまり企業経営面での、アメリカ企業が日本企業のやり方を受け入れたという問題は、今後研究で深められる必要がある。

4 自己責任論のはびこりと現在の日本社会

- A ところで、昨今の自己責任論のはびこりに腹立たしい思いをしている。なぜか、そしていつ頃からか、何かにつけ人をやり込め、さげすみ、排除するために、常套句として、この言い回しが言い放たれるようになった。最後にこの問題について話をしな

いか。これは高度成長の歴史的意味に関わる問題でもある。本書でも、著者は「90年代後半に、日本社会は構造的な変容を遂げた」（『幸せ』122頁）としながら、「自己責任論は、90年代に生まれた新しい〈社会意識〉である。終身雇用と相互関係になった機会均等論を模倣しながら出現し、いまだに掲げられたままぼろぼろになった機会平等論の隣に座った。このような模倣と二重化も、〈社会意識〉のふるまいのひとつである」と述べている。つまり、戦後社会を駆動させた階層上昇の社会意識が「同型的転移」をして、自己責任の社会意識がひろがったというのが著者の理解である。こういう表現もいささか評論的で、もっと端的な説明をと思うが、同型的転移とは、著者によれば従来の社会意識を受け継ぎながら、別の意味を込めていくような移し変えである。

A 僕も最近の自己責任論の横行は気になっている。本来、投資に関わる用語であったのが、90年代以降、このようなニュアンスで使われるようになったというのは著者の指摘の通りだろう。

B 問題は、なぜ90年代以降に自己責任論がひろがったかという点だ。

A うーん、難しいな。確かな根拠をもっているわけではないが、90年代以降に進んだ格差社会の進展と関係があるのではないかと思っている。どういうことかということ、教育学や労働史の古典的著作であるあのポール・E・ウィリス著『ハマータウンの野郎ども』に関して、荻谷剛彦が「階級文化という集団的な支えがないことは、若者たちが進路選択の問題を含めさまざまな問題を自己責任として引き受けなければならないことを意味する。そこで底辺へと追いやられる日本の若者も、自ら進んでフリーターやニートの道を歩んでいるかのように見える。ところが、学校から『降りる』ことで、将来の成功の道を自ら閉ざしたとしても、それを称賛し、支持してくれる野郎どものような階級文化は存在しないのである」（新潮社、Foresight、「連載ブックハンティング・クラシックス」[11]、<http://www.fsight.jp/subcategory>, 2015年6月21日）。あえて通俗的にいえば、人生いろいろ生きていく道はある。小さい頃から嫌いなのに勉強させられて、難関大学に入って大企業のサラリーマンや医者になるだけが人生じゃない。自分は農民の子ども、労働者の子どもであり、働いている父親の姿はカッコいいから、また辛気臭い勉強をしたり、一生デスクワークをするなんてかなわないので、農民や労働者になるという個人の人生の選択が社会的に認知され、その結果としての人生も成り立つような社会、否、もっと端的にそういう選択を許容する社会かどうかの問題だと思う。本書は確か50年代のフィールドワークを踏まえて書かれているので、現在

のイギリス社会がこの通りかどうかは僕には分からない。しかし、90年代以降の日本社会というのは、本書に描かれたイギリス社会とも、日本の高度成長期の社会とも違う。

B また、君のいつもの癖が出てきた。もっと手短にやってくれないか。

A いや、大きな問題なので、手短にやるのは難しい。話を続けると、この本、『幸せ』の中で、社会学者・宮本みち子氏の本の一節が引用されている。高度成長期から90年代以降の標準的ライフスタイルに関する見解で、とくに独自の見解でもないが、説明しやすくなるので使わせてもらう（『幸せ』118頁）。工業化時代に完成した標準的ライフスタイルの条件は新規学卒就職、正規雇用、結婚、子どもをもつこと、子どもの教育への投資を通じた階層上昇、退職後の年金性格など。このようなライフスタイルが広く大衆化し、中流意識が分厚く形成されたのが高度経済成長期で、その流れが1990年代初頭のバブル崩壊まで続く。その後の長期不況、グローバル経済競争の激化、規制改革と構造改革を経て日本社会は構造的に変容を遂げる。その結果として、若い世代を中心に、従来の標準的ライフスタイルに乗ることができない層が分厚く形成されつつある——これが宮本説の要点であるが、高度成長期から90年代以降にかけての変化が簡潔に捉えられている。自己責任論というのは、90年代以降、標準的ライフスタイルに乗れなくなった者たちへ向けられ、それが理由で本人たちには納得せざるをえない言説として社会的に機能したということではないか。「やれば、できるのに、しなかった」、だから自分の責任だという建前実態はともかく、これにはなかなか抵抗できない。

B 実態は違うといっても、現在のような状況では有効ではない。

A 僕は最近、60歳を超えて自ら手を挙げて組合の執行委員をやった。勤務先で増えてきた3年雇用の契約職員の待遇改善を図りたいと思った。組合の大会などで要求化の必要性を繰り返し主張し、やっと組合の要求に乗って2年間交渉したが、学内に多数いる契約社員の方は誰ひとり参加せず、教員である僕ひとりが交渉に当たる形になった。要求は最長3年を5年に伸ばすなど、大したものではない。その時、ある感慨を持った。自分たちの問題なのに、組合の交渉にも来ないのか。契約職員の人たちが要求に不満だったり、反対ということではないだろう。また、一番大きな問題として、大学に対するある種の配慮があったかもしれない（組合員ではない）。親と同居して、とくに現状に不満ということはないなど、他にも理由は考えられる。しかし、一番気になったのは、彼女たち（契約職員はほとんど女性）に契約職員であることにある種の

負い目があるのではないか、それが交渉の場に出る障害になっているのではないかということである。契約職員に同情を寄せる教職員も少なからずいる。しかし、そのような教職員も、正職員との間にある大きな賃金賃金格差や有期雇用の問題になると、採用の違いを気にする人が少なくないと僕は見ている。正職員は新卒で採用される。それは誰にでも門戸は開かれている。その時にチャレンジをしないで、今ごろ何をいつている——。これは雇用延長の問題ではないが、契約職員の人たちに対する周囲のまなざしの根本にあるのは、こうした突き放した見方ではないか。その、いたたまれぬまなざしの中で、彼女たちは委縮し、仕方なく納得する。

B 君のいつていることは、個人の選択の問題が鍵ということか。

A まあ、そうだ。さっきもいつたように、「やれば、難関大学にでも入れるのに、なぜ（標準的ライフサイクルが保証されている）それを選択して地道に勉強しなかったのか」、「新卒の23歳の時に正社員としての採用があったのに、（結婚などして）それを選択しなかったのか」、「まじめに努力せず、残業・転勤もしないような者は、リストラされても当然だ」等々。最後のは、熊沢氏いうところの、「生活態度としての能力」（日本型能力主義）、「ゆわれなき差別」に関わる言説である。これらは単に労働者だけでなく、あらゆる階層と言動に向けられる。例えば農民に対しては、こうだ。「勉強しなかったから、農業しかできない」、「農業しかできない人間が（生産性の低い農業に従事し）日本経済の足を引っ張り、そのうえ補助金が欲しいなどとは論外だ」。僕の信頼する農民作家の山下惣一氏は、日本の国民に広くみられる農業・農民に対する蔑視にはこうした差別意識があると繰り返し強調している。これは山下氏のひがみ根性でも何でもなく、物事の本質を見抜いた意見だと思う。一言でいえば新自由主義ということになるが、何のことはない、豊かさが実現された段階に出現した新たな差別にすぎない。

B 君のような意見だと、高度成長期は、自己責任論はなかったのではなく、階層移動の激流の中、総中流意識化により入り込む余地がなく、いつなれば社会的に封印されていた。そして、80年代の「荒れる学校」、オタク文化などは、高度成長期のひずみが「対人関係や『心』の問題として内向化した」（荻谷氏）という、日本的な、つまり独自の階級文化を持たない社会において、それに対応して独自に発現した生徒や青年による抵抗と見るべきだということになるね。先に君は高度成長期は農家の子どもらにとっては「第2の解放」を意味するともいつた。これも、高度成長期の全体的評価としては検討の余地はないか。

A オタク文化は、日本の家族のあり方に対応したきわめて特殊日本的な社会現象だと思ふ。子どもは大学入学とともに経済的自立を求められるアメリカ社会では考えられないことではないか。それはともかく、僕はとくに変わったことをいっているつもりはない。むしろ、一般的な見方に立脚しながら、僕なりの言い方をしているだけだ。「第2の解放」論も、別に逃げるわけではないが高度成長期の全体的評価としていっているのではなく、当該期の重要な特徴をやや強調していっているにすぎない。この本では高度成長の評価がないというか、低すぎるので。ところで、高度成長期に関しては、日本の高度成長の特徴、つまり戦後10年が経って、たかだか20年弱の間に急激な経済成長を遂げ、依然として農業国的な特徴を保持していた日本経済が世界的にも一等の重化学工業国に変貌したことが社会や政治にどのような影響を与えたかという観点からの研究が1つ重要である。日本の高度成長の急激さの問題である。これも熊沢氏が指摘している点であるが、悪評高い大河内一男の「出稼ぎ型労働力論」の一部再評価、つまり「日本の労働者階級は、…大規模な下層社会が都市に生まれ、そこから工場に労働者が通うというかたちでは形成され」ず、「農村を故郷としたまま個人単位の滲み出るような雇用労働者化」(『労働研究』33頁)である歴史的意味を問う必要がある。その中で件の階層移動や階層構成の歴史的意義も明確にされる必要がある。また、その中で「1968年」の見直しも重要な研究課題になることを強調しておきたい。ドイツやフランスでは「1968年」によって社会と政治が大きく変化した。一方、日本ではその影響を受けて運動は起こったが、社会や政治に対する運動の影響は比較にならないほど小さく、その伝統的・権威主義的性格は基本的に不変のまま次の時代に持ち越された。この違いを生んだ理由は何か。これは、高度成長の急激さと裏腹の問題ではないかと考えている。人の考え方、広く文化というのは急には変わらない。いずれにしても、「68年」と文化を含む社会構造の分析を通して、この問題の解答が出されなければならない。著書の、「全共闘運動は、学卒者の非エリート化に対する異議申立だったという解釈」(『幸せ』159頁)だけでは決定的に不十分だと思う。

B 自己責任論もだいたい議論したのでここらあたりでまとめよう。

A 戦後日本社会論については渡辺治氏の「開発主義国家」論(渡辺『企業支配と国家』青本書店、1991年、等)や後藤道夫氏の「日本型大家社会」論(後藤『収縮する日本型〈大家社会〉』旬報社、2001年)など注目すべき研究がある。最終的にはそうした研究も踏まえた再検討が必要である。それは横に置いて、自己責任論のひろがりに戻るけど、例えば戦前の日本社会のような階級社会では、今のような自己責任論がひろが

らなかったことだけは確かではないだろうか。今のようなギリギリ公正かつ平等な社会（もちろん非正規雇用や子どもの貧困，地方の問題等を考えると議論の余地はある）において，否，より正確に公正平等が実態としてだけでなく，建前としてもかなり揺らいだ社会において，その矛盾を封じ込める糊塗策，対処として今のところ社会的威力を発揮しているのが，この自己責任論の言説だと思う。1970年代半は以降の労働組合の力の低下など，人間観，社会観における自己責任論のはびこりを考えなければ理解できない。

B こんな状況はいつまで続くと思う。

A 雇用労働問題については，いつに国や労働組合の対応にかかっている。雇用労働問題を論じながら国や労働組合については目配りが無い。この点は本書の重大な問題点として気になる。先進国の中で日本ほど労働規制の弱い国がないことは周知の通りで，その中，現政権が岩盤を砕くなどといって，いっそう企業寄りの方向で労働者派遣法改正に動いていたりする。労働規制については，岩盤どころか，ずぶずぶの軟弱基盤である。労働組合も非正規や派遣の問題はまともに取り上げない。現状では，問題解決の決め手である同一労働同一賃金の実現などいつになるか，見当もつかない。国や労働組合のあり方がこのようなものである限り，社会に対峙する個人の力など弱いもので，私たちは何かあると当分苛烈な自己責任論のシャワーを浴び続けなければならない。その間に年金や介護，少子化の問題から，日本の，人間社会としての自己崩壊が本格化するのではないか。このままでは日本社会の持続的発展はありえない。その気づきがいつになるかという問題だと思う。君も同じだろうが，この点でも僕は現在の日本の状況をかなり深刻に受け止めている。

お わ り に

A 本書について熊沢氏は書いている。「実に多様な事象と広範な文化に対する抜群の目配りゆえに，めくるめく思いに誘われ，どこへ導かれるかわからない不安はつきまとうけれど，なによりもこれはおもしろい本である」（『労働研究』207頁）。同感である。問題は，対象の社会的な位置づけ，歴史的な位置づけである。こうした認識から，社会科学的な視点，あるいは歴史の視点で本書を読み直す作業を行った。

B 戦後史や高度成長期の歴史が盛んに研究されるようになった。いろんな方法と視点で今後研究が進むだろうが，多様な事象に目配りされた本書を読んで，高度成長の歴

史も、1980年代の視点（荒れた学校、オタク文化、オウム等）や90年代の視点（格差社会の進展）で研究するのも意義があると思った。90年代の視点というのは今日の視点に通じるが、ある特定の歴史的時点から高度成長期の歴史に光をあてるとまた違った歴史像が見えてくるかもしれない。もう1つ、民衆の歩んだ人生を歴史化する重要性も、本書を読んで改めて気づかされた点である。ただし、本書で取り上げられているのは有名人であり、しかもその人生の断片だけであるので、僕が考えているのとは違う。民衆の個人史ということになるのだろうか。こうした研究はいつの時代でも意味があるが、大衆社会が進んだ戦後史や高度成長期の研究ではとくに重要であると思う。君がやっているような社会経済史では見えないものが見えてくるはずだ。といっても、研究の方法等について積極的に提言する能力はなく、民衆の意識と行動に迫る全体的かつ長期の生活史を積み上げていくぐらいしか考えが及ばないが。今流行の言葉でいえば、民衆の「生きられた高度成長や1980年代の歴史」に徹底して寄り添った研究が求められているのだと思う。小栗英二氏の最新刊、『生きて帰ってきた男』（岩波新書、2015年）を一気に読んだ。1人の庶民である父親の軌跡を聞き取りによって歴史にした本である。シベリア抑留を体験した父親の戦後史、高度成長期の歴史が立体的に記述されている。歴史家はこのような仕事をしなければと思った。その感動もあって、最後にいわせてもらった。

- A 最後に君らしい話になってもっと聞きたいが、この辺で切り上げなければならない。僕がこの本について君と議論したいと思い立ったのは、今の君の意見と重なるかもしれないが、高度成長期の歴史を相対化してみたいと思ったからだ。単純に高度成長の「光と影」を明らかにするという話だけではなく、高度成長の時代を日本の歴史のなかに位置づける。もちろん、これは議論されてきたが、僕としてはまだ十分でないと思っている。とくに、現在を含め、後の時代との関連で高度成長の時代を位置づけることが重要である。こうした意味で、「多様な事象と広範な文化に対する抜群の目配り」をした本書は、その歴史的な意味づけにおいていろいろ問題を持ちながらも、われわれに考える多くの素材を提供し、知的刺激にあふれている。僕には、歴史的思考を鍛えてくれた、有益な本だった。
- B まとめの発言も出たようなので、終わりにしよう。この年になると君と議論するのは楽ではないが、たまにであれば喜んで応じるよ。また声をかけてくれたまえ。

